

生井利幸事務所 社会貢献事業

2012 年度・教養講座

「哲学」（総論・各論）

美意識の一考察

—異なる文化背景の自然観を手掛かりに—

英会話道場イングリッシュヒルズ

Lesson Extraordinary 受講生

Y.B.

2013 年 4 月 6 日

【要旨】 本稿では、美意識の一考察を行うために、デカルトの『方法序説』の一節を検討箇所とし、西洋社会で 17 世紀以降に広まった機械論的自然観に注目する。さらに、同時代の異なる文化背景を持った 2 つの庭園を比較検討することを手掛かりに、「理性的な美意識」と「感性的な美意識」の表現方法を探求する。

目次

『方法序説』 検討箇所.....	1
はじめに	1
西洋思想史におけるデカルトの立ち位置	1
デカルトの思想 ―合理主義の誕生―	2
機械論的自然観	4
日本的な自然観を反映した庭園	4
美意識の比較文化的考察.....	5
まとめ	6
参考文献	7

『方法序説』 検討箇所

「[・・・] こうしてわれわれをいわば自然の主人にして所有者たらしめることである。」
(p.82 : 12-13)

はじめに

自然界を精神と物質、主体と客体、観察する側とされる側との2種類の存在に分けるデカルト的な心身二元論は、現在でもヨーロッパの世界観の一部となっている。『方法序説』の検討箇所は、近代以降のヨーロッパの自然観を如実に示しているものである。谷川は、検討箇所に対して、「こうした考え方が、バイコン、デカルトを出発点とするヨーロッパ近代の自然観の哲学的な基礎になっていきます。そして機械論的な自然観はヨーロッパでは主流となり現代につながり、それを自然破壊に結びつけたりする見方もあります」(谷川、p.138)と述べている。このような機械論的自然観が具体的に表れる事例として、17世紀に作庭されたフランス式庭園が挙げられる。本稿では、ヴェルサイユ宮殿(図1)の庭園と、同時代の日本の庭園(図2:南禅寺方丈庭園)を比較検討し、異なる文化背景の美意識について考察してみたい。

【図1】ヴェルサイユの庭園(フランス)



【図2】南禅寺方丈庭園(日本・京都)



西洋思想史におけるデカルトの立ち位置

古代ギリシア思想と、ユダヤ=キリスト教思想の二大思想は、人類史・世界史の潮流を捉える上で極めて重要である。2つの思想は、相反するものではなく、歴史の流れの中で、多くの哲学者・思想家たちによってその関係性について論じられ、現代においても西洋文明社会の精神基盤となっている。

キリスト教思想は、5世紀にローマ帝国が崩壊した後のヨーロッパ中世時代において、西洋思想の柱として絶大な権威と影響力を誇った。初期キリスト教は、プラトン主義と、

その後のプロティノス（204～269）の新プラトン主義の思想を教義に取り込んで発展し、教会を中心とした伝統的な思想体系が少しずつ権威化されていった。ヨーロッパ中世のスコラ哲学者たちにとって、キリスト教の教えは神からの直接の啓示であり、絶対的な真実として何よりも優先させながら、古代ギリシア哲学の所説を詳しく分析し、教義と矛盾しないように融合を試みたのである。さらに、トマス・アキナス（1225-1274）は、「信仰と理性の調和的共存を打ち立てようとした。彼は主に、アリストテレスの哲学をキリスト教の教説と西洋文化に合体させるという責務を負った」（コリンソン、p.82）のである。アキナスによって、アリストテレスの思想もキリスト教の教義へ融合がなされ、2つの思想体系を調和させた世界観を築いた。アキナスは、「それまでの西洋思想のとくにすぐれた考えをすべて統合し、それがキリスト教教義と何ら矛盾していないことを示した」（マギー、p.59）のである。

しかし、その後、コペルニクス（1473～1543）やガリレオ・ガリレイ（1564～1642）らの登場によって科学技術が発展し始めると、教会を中心とした社会の世界観が一転した。即ち、人々において神の存在に対する懐疑心が急速に広がり、教会の権威は弱体化して、1000年に及ぶヨーロッパ中世時代は終焉を迎えた。人々の間では、キリスト教の教義よりも、新しい科学的な世界観が受け入れられ、確実性の究明が西洋哲学の中心となっていったのである。

近代哲学の祖であるデカルト（1596～1650）は、まさにこの新しい時代に、西洋思想の流れを大きく変えた。デカルトの「科学的な証明のためには疑う余地のない事実から出発し、その事実から推論を重ねて論理的な結論を導きださなければならないという信念」（マギー、p.88）は、西洋科学の根本的な原理となり、デカルトの思想は、アインシュタイン（1879～1955）の登場まで、西洋思想の根幹を成していったのだ。次章では、デカルトが確実性の追求のために行った懐疑について整理したい。

デカルトの思想 ー合理主義の誕生ー

デカルトは、『方法序説』において「我思う、故に我あり」（*cogito, ergo sum*）という言葉を残した。「この世のあらゆる事物を懐疑した上で『意識の内容』は疑えるが、『意識する自分の存在自体』は疑えないという結論を導き出した」（生井、p.73）のである。本章では、近代主観主義が成立するに至ったデカルトの懐疑について整理する。

デカルトにとって懐疑は、「全てを疑う」という思考実験であり、絶対に疑えない確実な出発点、即ち、第一原理を発見するための方法である。懐疑の対象は人類の到達した知識全体におよび、自分の記憶や感覚の経験の明証性、自分を取りまく世界の存在や自分自身の身体が存在といったあらゆるものを疑うことが可能かどうかを考えた。

デカルトは懐疑の第一段階として、感覚に由来する知識であるア・ポステリオリな知識を疑う自然的懐疑を行った。「感覚は時にわたしたちを欺くから、感覚が想像させるとおり

のものは何も存在しないと想定しようとした」(デカルト、pp.45-46)のだ。そして、見たり聞いたりした経験を通じて得た知識は、錯覚や狂気、夢かもしれないと、当てにならないという結論に至った。

次に懐疑の第二段階では、理性に由来するア・プリオリな知識を疑う形而上学的懐疑を行った。デカルトは「幾何学の最も単純なことからについてさえ、推論をまちがえて誤謬推理をおかす人がいるのだから、わたしもまた他のだれとも同じく誤りうると判断して、以前には論証とみなしていた推理をすべて偽として捨て去った」(デカルト、p.46)のだ。さらに、「真理の創造者である神が我々人間を騙しているかもしれない」と想定し、欺く神という仮説を立てた。この段階で、「人間の認識能力が完全に狂っている」、「人間は何一つ正しい知識は得られない」という認識に至った。

これらの懐疑を経て、疑うことができたり、神によって欺かれたりされるのは、考えるものとしての「私」が存在するからだということが明らかになった。たとえ自分が考えている思考対象が偽りだとしても、それでもやはり思考対象をもっている間、自分は考えているのである。それ故、自分が考えていることを疑うことは不可能だということが明確になった。そして、全てが疑わしくとも、考えるものとしての「私」の存在は確実であることから、「考えるものとしての私」、即ち「第一原理」(cogito, ergo sum)への到達に至ったのだ。

論理的思考を行う上において、この第一原理を出発点とすると、考えるものとしての「私」の存在が疑いようもなく認識される。このことから明晰かつ判明に把握されるもの、即ち、「わたしたちがきわめて明晰かつ判明に捉えることはすべて真である」(デカルト、p.48)という「真理の一般規則」を導き出した。「私は考える」という命題を顧慮するだけで、その命題の真理性が打ち立てられること、それ故、自分が考えるものとして存在していることを疑うことはできないのである。また、真理の一般規則は、考えるものとしての「私」、即ち、「主観」が扱うことから、知識の真理性の根拠は「主観」であるといえる。デカルトが懐疑を通じて発見した自分が「考えるもの」であるという確実さは、知識の体系を構築するために要求される基盤となり、近代主観主義の成立に至った。

デカルトの到達した理論から理性を重んじる合理主義が誕生し、アイザック・ニュートン(1642~1727)の力学とともに、新しい科学的世界観として西洋文明社会に多大な影響を及ぼした。「人間は、自然をただたんに理論的に理解するだけでなく、それを征服し、搾取しはじめたという意味で、まさに自然の支配者」(マギー、p.69)となっていたのである。自然の支配者という発想は、物理学の発達や、その後の産業革命という形だけではなく、人々の美意識にも顕著に表れている。次章では、美意識の一例として、機械論的自然観が目に見える形として表れているフランス式庭園について考察する。

機械論的自然観

17世紀以降のヨーロッパの庭園は、理性を重視する合理主義的な思想が反映された幾何学的な庭園が主流となった。フランス、ヴェルサイユ宮殿の庭園（図1）は、1661年にルイ14世が造園家アンドレ・ル・ノートルに設計と整備を命じ、完成までに約40年かかった壮大なものである。庭園には「端正に刈り込まれた並木道が走り、台座のついた壺や彫像が置かれ、高台や湖があつて数マイルも彼方の田園へと広がっている」（ゴンブリッチ、p.447）ことから、ルイ14世の権力の大きさを示している。ルイ14世は、豪華な装飾が施された宮殿や、壮大な庭園で完璧な美を表現することにより、人間（貴族や民衆）だけではなく、自然までも掌握した王の権力を示そうとした。人工的で幾何学的な庭園は、自然を人間の力で操作できることを証明する装置であつたといえる。

17世紀以降に増え始めた人工的で幾何学的な庭園について、高山は次のように述べている。

「農業革命で文字通り土地は囲いこまれ、産業革命によって都市また自らを周囲の世界から囲いこむ。17、8世紀、一途に拡大しつづけた世界のイメージが、怒濤のように反動の嵐を呼びこみ、人類がかつて知らなかったほどの『囲いこむ』身振りを文化の中でつくりだした。自然に向けられた眼差し、自然に対してする人間の権力意志のうえに、決定的な大変化が惹き起こされた。[・・・] 18世紀風景庭園を見ても、同時代博物館図譜を見ても、そこにあるのは風景のシミュラクル、蝶や花の記号以上のものではない。われわれを自然から遠ざけるための悪意に満ちた快樂機械があるのにすぎない」（高山、pp.138-139）

当時の権力者たちは、「権力を美術によって飾り立てて人心を掌握しようとし」（ゴンブリッチ、p.447）、造園家たちはデカルトの機械論的自然観の影響を受け、人間と自然を切り離した上で、自然を幾何学的な「型」にはめ込むことで、完璧な美を追求したのではないだろうか。

日本的な自然観を反映した庭園

一方、日本的な自然観を反映した庭園は、フランス式庭園とどのような点で異なるのだろうか。小野は、日本庭園の概念について次のように述べている。

[・・・] 日本庭園という概念が、特定の様式を指すのではなく、日本列島という風土のもと、それぞれの時代の社会や文化の中で産み出され、育まれてきた各種の様式の庭園を含むものだからである。この点で、ヨーロッパのイタリア式庭園、フランス式庭園、イギリス式庭園が一般にそれぞれ特定の時代の様式の庭園を指すのとは、好

対照をなす。(小野、p.i)

日本の庭園は、時代によって変遷し続けてきたため、本稿では、デカルトが活躍した時代と同じ頃に作られた日本の庭園を手掛かりに、両者の相違を考察してみたい。

デカルトと同時代に日本で活躍した造園家の一人に小堀遠州(1579-1647)が挙げられる。小堀は、遠州流茶道の流祖で、千利休(1522-1591)、古田織部(1544-1615)と続いた茶道の本流を受け継ぎ、「綺麗さび」という幽玄・有心の茶道を創り上げた。古田織部の後を継いで将軍家茶道指南役でもあった小堀が作庭した庭園は、二条城二の丸庭園(1626頃)、南禅寺方丈庭園(図2:1596-1615の間)、南禅寺塔頭金地院(1630頃)、仙洞御所(1630-1636頃)などがある。小堀が作庭した庭園には、茶道の美学が多く反映されている。

茶道を宗教的な観点から捉えると、仏教、特に禅宗との深い関係が挙げられる。茶道では、日常の俗世を離れ、仏教の修行に入ったような生活が理想とされる。インドを起源とする仏教は、伝播の過程でそれぞれの民族の需要や気質による変容がある。日本の場合は、自然界のあらゆるものに精霊が宿ると考えられてきたアニミズム的信仰と神道とが混合した独自の仏教が形成され、茶道にも大きな影響を及ぼした。利休の教えである七則の一つ、「花は野にあるように」に象徴されるように、茶室の中においても、自然と人、自然とモノとが調和させ、一体化しようとする試みが随所になされている。このような茶道の精神を基盤とした小堀の作庭は、日本的な自然観や宗教観が反映されている。例えば、南禅寺方丈庭園(図2)は、「虎の子渡しの庭」とも呼ばれる巨大な石を横に寝かして配置して、仏教的な世界観を表現している。また、この石組は、手前から奥に向かって小さくしていくという遠近法を採用している。整然と幾何学的な遠近法を用いたヴェルサイユの庭園(図1)とは異なるが、見る者には確かに奥行きを感じさせる。さらに、背景である東山の景色を「借景」とすることにより、人間が作り出した庭園と、自然の景色との境界を曖昧にして、自然との調和を図っている。

自然体のままで季節感を大切にし、人間が自然の中に溶け込もうとする日本の庭園は、自然を「型」の中に囲い込もうとするヨーロッパの幾何学的な庭園とは対照的であるといえる。

美意識の比較文化的考察

ヨーロッパ的な幾何学庭園も、日本的な庭園も、自然を人間の手によって「庭園」という人工物に変えてしまう点では、共通している。しかし、基盤となる自然観や宗教観の相違によって、表現される庭園の形式は大きく異なる。17世紀以降の幾何学的なヨーロッパの庭園は、理性を重んじたデカルトの機械論的自然観が反映されている。人間が自然の主人であるという精神が基盤にあり、自然を囲い込み、幾何学的な枠組みの中に美を見出

そうとした。一方、日本的な庭園は、理性よりも感性が重視された美意識が反映しているといえる。

山田が検討個所について、「[・・・] しばしば誤って批判されるような自然破壊の思想にはつながらないであろう。デカルトの主張は、人間は精神的には自然の主人であっても、身体的には自然の一部であり、そうした自然（物的自然および身体的自然）を養い育てて人間の便宜に供する、ということにとどまる。これは人間と自然との調和の思想であって、現代的な自然の殺戮とか環境破壊とは正反対の思想である」（山田、p.211）と述べているとおり、デカルトの真意は自然破壊ということではなかったのかもしれない。しかし、後にデカルトのテキストを読んだ人々は様々に解釈し、時には歪められてきた。

例えば、南禅寺方丈庭園が、枯山水という手法で、滝や清流の水の流れを、石や砂で表現してダイナミックな自然景観を造り出しているのに対し、ヴェルサイユの庭園は自然を破壊し、大掛かりな工事を行って大水路を築いた。このヴェルサイユの庭園に象徴されるように、人間が自然を囲い込もうとする機械論的自然観が行き過ぎると、環境破壊につながる。デカルトの機械論的自然論は、現代の我々が直面している地球環境問題としても捉えることができるため、現在でも論争が続いているのである。

まとめ

生井先生は、哲学講座で『美』と『美意識』について述べた際、美意識を（１）「感じる能力で美しいものを捉える“感性的な美意識”」と、（２）「純粹性極まりない理性によって美しいものを捉える“理性的な美意識”」の２つに分類した。この２つの美意識が重なって融合したとき、人間は「理性的・感性的存在者」となり、一般的な理想的境地に達することになる。しかし生井先生は、さらに深い究極的な境地として、本当の美意識は「一般的な美意識の概念を越えた独自性極まる美感のため、理性と感性の範疇から出ているものである」と定義している。

本稿で扱った「理性的な美意識」が反映されたフランス式庭園と、「感性的な美意識」が反映された日本庭園は、一見すると全く異なる美意識と解釈できる。しかし、美を表現しようとするその根底には、文明・文化を超越した共通する美意識が隠されているのではないだろうか。私は哲学講座の受講や、本稿での考察を通じて、人間は不完全な存在者であるが故に、「究極的な美意識の境地」への希求心が絶え止まないのではないかという結論に至った。

本稿では、文化背景の異なる２つの庭園を手掛かりに、一般的な範疇での美意識を比較文化的に考察することに留まってしまった。今後の課題として、哲学講座で学んだことを基盤に、身の回りの「美」について感性で捉えながら、理性を駆使して立体的に思考の枠組みを構築し、さらに深い境地の「美意識」を探求したい。

参考文献

伊東俊太郎編『日本人の自然観 ー縄文から現代科学までー』（1995年、河出書房）

小野健吉『日本庭園 ー空間の美の歴史ー』（2009年、岩波書店）

ディアーネ・コリンソン著、山口泰司・阿部文彦・北村晋 訳『哲学思想の50人』
（2002年、青土社）

E.H.ゴンブリッチ、天野衛 他訳『美術の物語』（2007年、ファイドン）

谷川多佳子『方法序説を読む』（2002年、岩波書店）

高山宏『庭の綺想学 ー近代西欧とピクチャレスク美学』（1995年、ありな書房）

ルネ・デカルト著、谷川多佳子訳『方法序説』（1997年、岩波書店）

生井利幸『人生に哲学をひとつまみ』（2003年、はまの出版）

保坂幸博『日本の自然崇拜、西洋のアニミズム』（2003年、新栄論）

ブライアン・マギー著、中川澄男監修『知の歴史』（1999年、BL出版）

山田弘明『「方法序説」を読む ー若きデカルトの生と思想』（1995年、世界思想社）